

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究(開拓)

研究期間：2017～2023

課題番号：17H06183・20K20275

研究課題名(和文)日本の学術体制史研究 研究基盤となる日本学術会議資料整備と研究環境構築の検討

研究課題名(英文)Historical study of the Science Council of Japan

研究代表者

久保田 明子(Kubota, Akiko)

広島大学・原爆放射線医科学研究所・助教

研究者番号：40767589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円

研究成果の概要(和文)：2020年から注目された会員任命問題以前より、本研究は日本学術会議の問題に着手した。研究目的は、第一に今まで着手されなかった日本学術会議の資料を整備することであり、第二はそれらの資料を活用して日本の学術体制史を検討することであった。会員任命問題の大きな報道は、本研究の重要性を確認できた半面、現在進行形の問題と並走して調査研究を行う困難でもあった。更にコロナ流行による行動の制限は、現場作業が必要な、実際的なアーカイブズ作業を伴う本研究において打撃が大きかった。結果、当初の予定を完全に実施することはできなかったが、書庫内の環境改善、資料の分類と配架、一部分の目録情報の整備等基礎的な作業は実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本学術会議では、利用者の希望通りにレファレンスをするのが難しかった。それは、会議側が消極的だったのではなく、長年未整備の資料状況にも由来するものだった。その点、本研究で資料の環境や情報の基本的整備を行い、多少貢献できた。研究期間中に会議創立70年を迎えたが、記念企画の資料展示「日本学術会議の設立と組織の変遷：地下倉庫アーカイブズの世界」は、本研究が大いに貢献した。また、本組織の設立期以来の膨大な資料群は、日本の科学者がどのように学術体制を整備し、学術発展の議論を行ってきたか、組織運営も含めた様相を明らかにすることが可能であることを指摘し、という学術体制研究の基盤の一端を形成できたと考える。

研究成果の概要(英文)：This research was initiated on the issue of the Science Council of Japan before the membership appointment issue that has been in the spotlight since 2020. The first objective of this research was to develop materials on the Science Council of Japan, which had not been undertaken before, and the second was to utilize these materials to examine the history of the academic system in Japan. While the large media coverage of the membership appointment issue confirmed the importance of this research, it was also difficult to conduct research in parallel with the ongoing problems. Furthermore, the restrictions on activities due to the Corona epidemic were a major blow to this research, which involves practical archival work that requires field work. As a result, we were not able to fully implement our original plan, but we did carry out basic tasks such as improving the environment in the archives, classifying and arranging materials, and preparing some cataloging information.

研究分野：アーカイブズ学

キーワード：学術体制 アーカイブズ学 科学研究 科学史・科学技術史 科学と社会 科学と国

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本学術会議は、近代以降の日本において、長く学術研究を牽引し、あるいは学術体制について模索しながら進みつづけ、特に学術体制の核として「科学」と「社会」を結び付けることに重要な役割を果たそうとしてきた機関である。しかし、その組織そのものの研究は、着手したいと考える研究は多くいた/いるものの、十分に、あるいは自由にされてはこなかった。そしてそれは、日本学術会議の資料が、活用するに十分な整備がなされていないことと無関係ではない。これらの資料群が、現在まで十分に整理・公開されてこず、活用されてこなかったために、研究・教育・政策等における日本の研究者コミュニティの役割は、これまでほとんど明らかにされてこなかった。また、現在の社会の情勢や要請、資料の劣化を考えると、これは緊急を要する問題である。

そこで本研究では、日本学術会議についての基礎研究の開始とアーカイブズ学の知見から資料の整備を実施し、その研究基盤を構築する。またその成果は、研究後も日本学術会議での運営や研究者の資料活用、社会の要請にこたえられる形で整備する。そして本研究が研究機関における史資料の保存環境改善対策の一つのモデルとなることを目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究では、アーカイブズ学にのっとった形での実際の資料整備と日本の学術体制研究(日本史、科学史といった歴史研究)の知見を活かした資料整備と研究基盤の構築を2本柱とした。具体的には、

アーカイブズ学的アプローチ...資料の置かれた環境や資料の整備を検討し、今後、永続的にその環境を保全するための調査研究を行った。資料の置かれる書庫については、改善点を点検し、可能な限りの改善措置を行い、資料の延命と利活用のしやすさを検討することを目的とした。資料については、歴史的な文書類の、経年劣化が起きている現状を正しく把握し、現在可能な限りの保存措置を行うことを目的とした。これらの調査と研究は、終戦後に大きく変革した数多くの組織・機関における、蓄積された、現在となっては歴史的な価値が高まった重要文書資料への措置として応用できる規範を作成できると考えた。

学術研究的アプローチ...近代以降の日本における学術研究、科学研究は、当然ながら、政治や社会に対し、その影響は大きく、且つ密接である。そのため、今後のより良い社会を目指すためにも、これまでの先行の研究や実態を把握することは、それらの重要な蓄積である資料群を、適切に、且つ使いやすいように利用できる環境を整える必要がある。これを実現するためには、やはり、日本の学術研究や政治・外交・社会の動きなどを把握し、且つ、学術研究(科学研究)の内容をある程度理解し、その歴史的な位置づけなどを考慮できる者がその整備に携わることが、かなり合理的で、良い環境を提供できるシステムを構築できると考えた。そこで、物理学、生物学、医学といった分野の研究者(科学史研究)、学術体制や組織の変遷を対象としている研究者、広い視野を持って本件を検討するための日本史研究者の深い関与を得て、時代性・内容に留意しながらの調査と整備を行うこととした。日本学術会議は、その組織については、大変多くの変遷を持っている。委員会などの組織もよく変更(拡大・縮小・消滅・復活・分野の追加など)されており、複雑である。また、組織内での、各委員会や部署へ付与された記号なども煩雑で分かりにくいところがある。そのため、日本学術会議に長年所属していた研究者の存在は必須であった。こういった主要な点での研究者を配置することによって、総合的な分析を可能とした。本研究では、それらの調査や検討を研究に寄与することと、日本学術会議の現在の担当者の作業のしやすさの構築を具体的に目した。

3. 研究の方法

アーカイブズ学的アプローチ...アーカイブズ学研究者、現役のアーキビストに、研究の設計段階からの関与を求めた。資料の置かれる環境等の調査と改善策等を検討する、保存科学分野の研究者は、文書資料において非常に厳しい環境下となっていた書庫の環境を、大きく変革した。具体的には、徹底した書庫内の清掃(床、壁、棚などのクリーニング)、アルコール消毒を伴う、1冊ずつ、1件ずつの資料に対するクリーニングを、計画的に数度実施した。これには、複数の大学院生のアルバイトも雇用し、大々的に行った(彼らはアーカイブズ学を学ぶ学生であったため、自己の研究のためにも役立つと考えた(後進の育成))。

また、そういった大々的なクリーニングの後には、文書群の秩序だった配架と、そのデータ化を試みた。実際、研究に着手した際は、これまで長く整備されていない状況のうえに、調査中に明らかになったことであるが、上野から現在地への引っ越しの際に起きた資料の混在(時期や内容

がばらばらになり、点在化し、まとまりなく混乱した状態)がそのままの状態となっていた。また、恐らく組織の担当者が何度か試みた整備によるやりかけの資料整理(そして未完了)のあとでも散見され、これが作業を非常に困難にもした(整備の方針などが不明瞭であるため、その秩序がわかりにくいものとなっていた)。そこで、の学術研究的アプローチを担当する研究者の協力を仰ぎ、その知見をもとに、改めて根本から整理をし直した。具体的には、基本、(1)時系列順(「期」の区分)、(2)組織単位順とし、それぞれの簿冊を順に並べた。その後、書庫内の所在を示すべく、棚番号を設け、その配置をデータ化した。結果、望む対象資料の「住所」(どの棚のどこにあるのか)をなるべく明確にし、レファレンスの向上を図った。以上のような経験(調査)は、アーカイブズ学での重要な研究テーマであるため、この分野の研究への寄与となると考える。

学術研究的アプローチ...上記のアーカイブズ学的アプローチの動きに連携・協力しながら、学術体制の組織の在り方の歴史的変遷、各時期における日本学術会議でのトピック、関連分野の収集された文献の意義・意味の検討などを同時並行で調査研究を行った。結果、日本学術会議は、外国の多くの学術研究組織との交流を持ち、関連の刊行物などを手に入れていた。また、多くの国際会議に参加し、その会議時に頒布された資料などもある程度保存されていることも確認できた。これらは、現在、大変貴重な資料となると考える。例えば、現在は消滅してしまったソビエト連邦での科学研究に関する会議資料や刊行物などがコレクションされているが、これは現在手に入れることは難しいものであろう。と同時に、英語以外の外国語の文献の多さについては、本研究ではフォローがなかなか困難であった。今後の課題の1つとしては、このような英語以外の多言語の対応(単に言語が理解できるだけでなく、できれば学術的なことの知識もないと読解も厳しいと考える)を考慮することが必要であることを感じさせられた。

また、書庫にある資料のほぼ全部が貴重な資料であることを改めて痛感したが、と同時に、残念ながら長年の中で失われたものもあることが確認できた。このため、「現在、何が欠けてしまっているか」といったアプローチも必要と考えた。

4. 研究成果

アーカイブズ学的アプローチ...本研究によって、近代以降の歴史を持つ公的な組織・機関の文書資料群のアーカイブズ学的整備の手法の案が提示できた。一方で、それらの実施の困難さも確認できた。今回は、日本学術会議の多大なるご理解・ご高配と、担当者の惜しみない協力のもとで実施できた。これは実に大変に幸運なことであった。しかしながら、こういった幸運は、いつも、いつでも得られるものとは限らないと考える。

学術研究的アプローチ...今まであまり大きく知られてこなかった学術研究体制の歴史について、今後どういった研究が展開できるか、そのきっかけを形成できたと考える。本研究での資料整備の経験から、今までなかなか指摘されてこなかった資料の存在やできごと、状況などを調査し研究する「窓口」のようなものを、今回少し開くことができたと考える。言い換えれば、今まで全くと言ってよいほどアクセスが難しかった資料群への細い「道筋」を作ったに過ぎないのかもしれないが、これによって今後本格的な学術的な研究の発展がみられることを期待したい。

同時に、前項に記した通り、英語以外の多言語による読解と調査研究の必要性、本来あるべきもののなかで何か欠けてしまったのかの検討の重要性も、今回の調査で新たに確認できた。今後は、そういったアプローチを持った研究の展開を期待したい。

また、全体を通して、研究期間中に新型コロナウイルスの流行が重なったことは、思いのほかダメージが大きかった。これは、単独で行う研究や机上で行う研究ではない本研究の特徴によるところが大きい。例えば、流行期間は、当然ながら日本学術会議への訪問は制限された。また、仮に訪問できたとしても、一時(いつとき)に多い人数で、密閉性の高い書庫で一斉に長時間作業することは、当時一番避けねばならない行動でもあった。そのため、調査のスピードは格段に落ち、調査と調査の間の時間が長く経つことや、コロナ流行による社会状況の変化からの影響を受けたことによって、調査方針、研究方針の変更を余儀なくされたことは、研究開始当初の計画遂行の大きな支障となった。そのため、研究活動の在り方を変更する部分も出てきて、結果、思うような調査研究ができない部分も見られ、当初の目的を果たし切れていない部分も出てきてしまった。

また、昨今、日本学術会議について、任命問題、あるいは組織の在り方に関する問題など、実に重要で思い議論が沸き上がり、現在もそれは継続している。そのこと自体、本研究の意義を示している反面、結果、そういった動きにより、やはり調査研究はやりにくい部分も実際には出てしまう。今だからこそ実施したい、という気持ちが基本にあるものの、実際、日本学術会議のご負担、こうむるご迷惑を考慮することは常識的に必要な部分であろう。本研究はいったん完了となるが、こういった問題意識をこれからも保持し、やはり日本の学術体制と社会、科学と社会の関係を今後も考え、研究していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 兵藤 友博	4. 巻 301
2. 論文標題 エッセー・レビュー 学術と政治をめぐる : 『日本学術会議の使命』を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 科学史研究. [第 期]	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兵藤 友博	4. 巻 61 (6)
2. 論文標題 「研究力劣化」を招いた競争資金政策 : 「研究大学」「公的研究機関」構想と財政基盤の格差	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館経営学	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田香穂里	4. 巻 303
2. 論文標題 『アグノトロジー』を振り返る : 科学史の中の"無知研究"のこれまでとこれから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 科学史研究. [第 期]	6. 最初と最後の頁 250-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼通二	4. 巻 27 (1)
2. 論文標題 日本学術会議を知る(9)わが国の科学者の代表機関としての日本学術会議	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 85-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤基行	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 社会の中の歴史研究とアーカイブズ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神医学史研究	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼通二	4. 巻 91
2. 論文標題 日本学会議略年表	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田 光司、高岩 義信	4. 巻 59
2. 論文標題 共同利用研究所における自治の相克	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科学史研究	6. 最初と最後の頁 38 ~ 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34336/jhsj.59.293_38	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 lida Kaori	4. 巻 80
2. 論文標題 Peaceful atoms in Japan: Radioisotopes as shared technical and sociopolitical resources for the Atomic Bomb Casualty Commission and the Japanese scientific community in the 1950s	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in History and Philosophy of Science Part C: Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences	6. 最初と最後の頁 101240 ~ 101240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.shpsc.2019.101240	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田明子	4. 巻 95
2. 論文標題 「捨ててええんよ」被爆資料の75年	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 長崎医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 230-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤基行	4. 巻 994
2. 論文標題 アーカイブを訪ねる 日本の精神医療史アーカイブをめぐる現状と研究利用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高岩 義信, 小沼 通二, 久保田 明子	4. 巻 74.1 (0)
2. 論文標題 日本学術会議の資料から見る物理学研究と学術会議の委員会活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本物理学会講演概要集	6. 最初と最後の頁 3235-3235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤基行	4. 巻 994
2. 論文標題 アーカイブを訪ねる 日本の精神医療史アーカイブをめぐる現状と研究利用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小風尚樹、中村覚、金甫榮、清原和之、福田真人、田中聡	4. 巻 974
2. 論文標題 対話の場としてのデジタル・アーカイブ：歴史研究者のためのデータ・リテラシーとウェブデザイン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兵藤友博	4. 巻 57 (6)
2. 論文標題 「安全保障」研究と大学の姿勢	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館経営学	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田明子、杉原清香、田代 聡	4. 巻 71 (4)
2. 論文標題 蜂谷道彦『ヒロシマ日記』から見る原爆医学研究の様相：放射線影響研究所所蔵資料と広島大学所蔵資料を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島医学	6. 最初と最後の頁 295-298
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健一、久保田明子、根本真実、長谷川 有史	4. 巻 71 (4)
2. 論文標題 経時変化をとまなう被ばく・被災関連資料のテキスト解析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島医学	6. 最初と最後の頁 295-298
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清原和之	4. 巻 2018年度
2. 論文標題 アーカイブズ学と公共歴史学に関する研究動向 「アーカイブ」とその「活用」を問い直す	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 資料と公共性：2018年度研究成果年次報告書	6. 最初と最後の頁 84-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iida, K. and R.N. Proctor.	4. 巻 2018
2. 論文標題 'The industry must be inconspicuous': Japan Tobacco's corruption of science and health policy via the Smoking Research Foundation.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tobacco Control.	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1136/tobaccocontrol-2017-054148	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小沼通二	4. 巻 87(6)
2. 論文標題 軍事研究に対する科学者の態度：日本学会会議と日本物理学会(4)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 580-595
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小沼通二	4. 巻 22(7)
2. 論文標題 初期の日本学会会議と軍事研究問題 (特集 科学者・技術者と軍事研究：科学・技術と研究者倫理にかかわる諸問題の科学的検討)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高埜利彦	4. 巻 27
2. 論文標題 日本のアーカイブズ制度を回顧する	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 62-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木睦	4. 巻 88
2. 論文標題 第288回定例研究会 議事録 被災アーカイブズの救助・復旧技術の実際	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アーキビスト：全史料協関東部会会報	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兵藤友博	4. 巻 22(7)
2. 論文標題 学術がたどった歴史から学ぶ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 5-18、23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田明子	4. 巻 19
2. 論文標題 相原秀二資料と「平和データベース」 - 広島平和記念資料館の文書資料の在り方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島平和記念資料館資料調査研究会 研究報告	6. 最初と最後の頁 65-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Sayaka Sugihara, Akiko Kubota, and Shinji Yoshinaga
2. 発表標題 Crowdfunding for 'Preserving A-Bomb Victims' Records for Future Generations: Specimen Database Project
3. 学会等名 Radiation Medicine from the Perspective of Radiation Disaster Medical Science Research (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 広島平和記念資料館「平和データベース」に入った相原秀二資料について： 原爆被爆映像に関する文書資料・博物館における文書資料の保存と活用に関する考察
3. 学会等名 広島平和記念資料館資料調査研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Iida, K. and A. Kubota
2. 発表標題 “The Research Institute for Radiation Biology and Medicine and ABCC in Hiroshima: How they collaborated with and also differentiated from each other,”
3. 学会等名 The 6th International Symposium of the Network-type Joint Usage/Research Center for Radiation Disaster Medical Science: Risk communication in radiation disaster, during crisis and reconstruction (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Iida, K.
2. 発表標題 Atoms for Peace in Hiroshima: Kawaishi Kunio, the Atomic Bomb Casualty Commission, and the development of nuclear medicine in the bombed city in the 1950s, in the panel: “International science, imperial transitions, and transpacific networks of knowledge at the early Cold War.”
3. 学会等名 Association for Asian Studies (AAS) 2022 Annual Conference, Honolulu, HI, USA (online), (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Iida, K.
2. 発表標題 “Studying biological effects of radiation: Contested collaborations of Japanese and American scientists in the bombed city Hiroshima,” in the “Contested collaboration in modern and contemporary East Asia” panel (chaired by Aya Homei; organized by Jaehwan Hyun),
3. 学会等名 History of Science Society (HSS)-Society for the History of Technology (SHOT) joint meeting, New Orleans (online), (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小沼通二, 高岩義信, 久保田明子
2. 発表標題 第2次世界大戦末期における科学研究費補助金の総合研究班 日本学術会議の物理関係資料IV
3. 学会等名 日本物理学会 秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高岩 義信, 小沼 通二, 久保田 明子
2. 発表標題 日本学術会議の資料から見る物理学研究と学術会議の委員会活動
3. 学会等名 日本物理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 原爆に関する医学調査と研究について：広島での研究組織の動向
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田香穂里
2. 発表標題 ABCCと日本の医学：原子力平和利用を背景に
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 兵藤友博、飯田香穂里、久保田明子、小沼通二、高岩義信
2. 発表標題 日本の学術体制史研究 資料整備とその歴史研究 その2
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaori Iida, Akiko Kubota
2. 発表標題 Atoms for Peace in Hiroshima: Medical uses of radioisotopes by the ABCC and a local medical community in the 1950s.
3. 学会等名 放射線災害・医科学研究拠点 第4回国際シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Motoyuki Goto
2. 発表標題 The History of the Development of Psychiatric Beds in Japan
3. 学会等名 Winter School on the History of Psychiatry at the University of Sydney (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田明子、小沼通二、高岩義信、兵藤友博
2. 発表標題 日本の学術体制史研究
3. 学会等名 日本科学史学会第65回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高岩義信、小沼通二、久保田明子
2. 発表標題 日本学術会議の資料から見る物理学研究と学術会議の委員会活動
3. 学会等名 日本物理学会第74回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iida, K. and A. Kubota.
2. 発表標題 "Medical research into effects of A-bomb exposure in Hiroshima in the 1940s - 1970s at Atomic Bomb Casualty Commission, Hiroshima University, and Research Institute for Radiation Biology and Medicine,"
3. 学会等名 The 3rd International Symposium of the Network-type Joint Usage/Research Center for Radiation Disaster Medical Science: Cooperative Wisdom Among Communities for Disaster Preparedness and Response (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保田明子・杉原清香・田代 聡
2. 発表標題 広島・長崎における原子爆弾の影響」について：医学調査映像を中心に
3. 学会等名 第59回 原子爆弾後障害研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Iida, K. and A. Kubota.
2. 発表標題 “ The ABCC ’ s research and public relations: Historical analysis of papers preserved in archives ”
3. 学会等名 The 2nd International Symposium of the Network-type Joint Usage/Research Center for Radiation Disaster Medical Science: For the Establishment of the Science of Resilience (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 学術研究は災害や復興に 役立つのか？ ～原爆からの広島復興を振り返って～
3. 学会等名 第26回日本組織適合性学会大会 市民公開講座「激甚災害におけるアカデミアの連携と地域復興」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 相原秀二資料と日映映像資料 基礎調査報告
3. 学会等名 広島平和記念資料館資料調査研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 資料所蔵機関の資料による様々な寄与の可能性 ～原爆関連資料をめぐる最近の経験から～
3. 学会等名 2017年度 第2回 自然科学系アーカイブズ研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 科学研究はどこにアーカイブされるのか？」
3. 学会等名 日本科学史学会 第70回 年会 開催校シンポジウム「大学アーカイブス・デジタルアーカイブス所蔵資料と科学史研究」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 カツオとマグロと放射線
3. 学会等名 日本科学史学会 第70回 年会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 ABA (Atomic Bomb Archives) 構想：被爆者資料のアーカイブズ問題について
3. 学会等名 第63回 原子爆弾後障害研究会（オンライン開催）ワークショップ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久保田明子
2. 発表標題 “被爆”を展示すること：広島での被爆資料についての社会発信とアーカイブズ
3. 学会等名 第25回 静岡歴史教育研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko Kubota
2. 発表標題 [ポスター] Embracing Nuclear War and HIBAKUSHA: JPPNW grows from doctors and scientists in the A-bombed cities of HIROSHIMA and NAGASAKI
3. 学会等名 IPPNW(International Physicians for the Prevention of Nuclear War), The 23rd World Congress in Mombasa, Kenya (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 H. Katayama, A. Kubota, S. Yoshinaga
2. 発表標題 The Vital Status Survey on the Atomic-Bomb Survivors: Difficulties Identifying Individuals
3. 学会等名 International Symposium on Natural and Artificial Radiation Exposures and Radiological Protection Studies (NARE2023 (国際学会))
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko Kubota
2. 発表標題 Skipjack, Tuna, and Radiation: Medical Investigation of Japanese Fishermen's Exposure to Radiation near Bikini in 1954 and ABCC
3. 学会等名 The 8th International Symposium of the Network-type Joint Usage/Research Center for Radiation Disaster Medical Science-Cooperative wisdom among communities for disaster preparedness and response (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 後藤 基行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 216
3. 書名 日本の精神科入院の歴史構造——社会防衛・治療・社会福祉	

1. 著者名 猪飼周平編著、後藤基行、高間沙織、赤木佳寿子、原田玄機	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 羅針盤としての政策史 - 歴史研究からヘルスケア・福祉政策の展望を拓く	

1. 著者名 政池 明 / 佐藤文隆、木村磐根、久保田明子、中尾麻伊香 寄稿	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 420
3. 書名 荒勝文策と原子核物理学の黎明	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 睦 (Aoki Mutsumi) (00260000)	国文学研究資料館・研究部・准教授 (62608)	
研究分担者	高岩 義信 (Takaiwa Yoshinobu) (10206708)	大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構・その他部局等・協力研究員 (82118)	
研究分担者	飯田 香穂里 (Iida Kaori) (10589667)	総合研究大学院大学・先導科学研究科・准教授 (12702)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	兵藤 友博 (Hyodo Tomohiro) (20278477)	立命館大学・経営学部・授業担当講師 (34315)	
研究分担者	小沼 通二 (Konuma Michiji) (70027340)	東京都市大学・その他部局等・名誉教授 (32678)	
研究分担者	後藤 基行 (Goto Motoyuki) (70722396)	慶應義塾大学・経済学部（日吉）・特別研究員（PD） (32612)	
研究分担者	清原 和之 (Kiyohara Kazuyuki) (10757264)	学習院大学・文学部・助教 (32606)	
研究分担者	菊谷 英司 (Kikutani Eiji) (60153045)	大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構・社会連携部・情報資料室・史料室・シニアフェロー (82118)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関